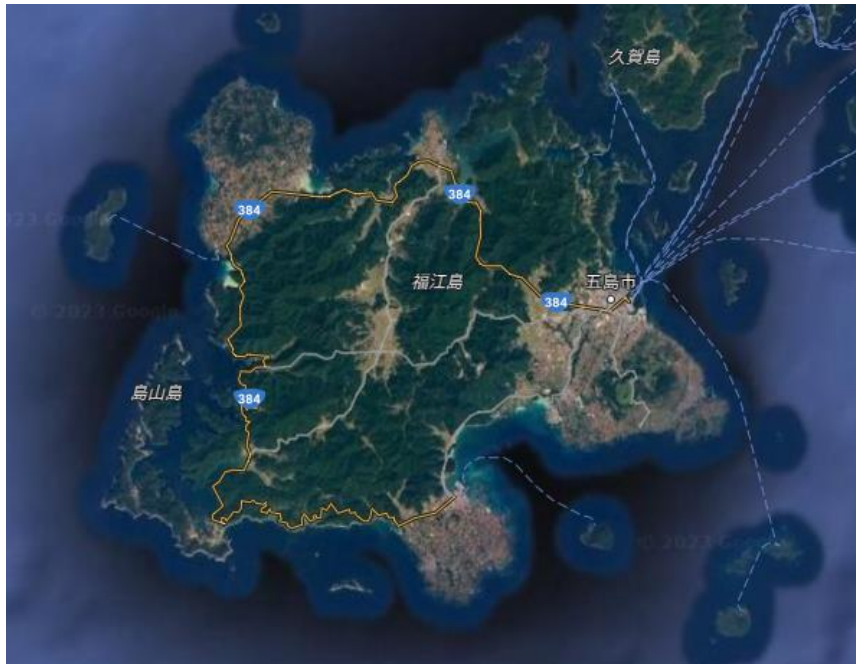


2308 離島覚書（長崎県・福江島）



グーグルマップより作成

令和5年4月19日

五島市役所

天神のホテルから福岡空港まで行ったものの、福江空港視界不良のため7時40分発の飛行機は欠航になった。第2便は満席のため夕方の便まで待たなければならない。しかたなく長崎に出てジェットフォイルで福江島に向かうことにした。

博多駅から在来特急で武雄温泉まで行き、新幹線に乗り換えて長崎まで行く。車窓からは黄に色づいた麦畑が続く。九州北部は2毛作地帯なのだろう。長崎駅周辺は全く変わっていた。県庁や県警本部が駅の近くに移転し、以前の長崎駅前の面影はない。海側に新たに出口ができていた。ここからタクシーで長崎港ターミナルに向かう。

11時30分発の水中翼船「ペがさすⅡ」に乗る。13時に福江港に着いた。

新幹線の中からレンタカー会社に、飛行機が欠航し船で行くと伝えたが予約が入っていないという。船着場にトヨタレンタカーの担当者がきていて、女子職員が4月を7月と間違えていたと謝罪され、事務所まで行かずにすぐに車を借りることができた。通常は免許証を見せるのだが、それも省略された。恐らくこの営業所では何回も借りているので私のデータは折り込み済みだったのだろう。

属島の調査、五島栽培漁業センターからの依頼でクエの産地調査、漁協合併の講演や養殖漁家などの調査で、福江島にはすでに10回以上訪れているが、今回は福江島全島を調査し、原稿を書く目的で訪れたものだ。

福江港から五島市役所に直行する。市役所には何回も訪れており、女の市長だった時に「クエサミット」が開催され、その際にクエの調査結果を報告したことがあった。

最初に3階の文化観光課で観光関係のパンフレットなどを入手。続いて2階の政策企画課に行き、市勢要覧をもらう。同じフロアの農林課で、農業と畜産業について担当者から話を聞く。1階に降りて、市民課で字別の世帯数と人口のデータをコピーしてもらった。

水産課は市役所の反対側に位置する県五島振興局の中にあるというので、振興局1階の水産課を訪ね、令和2年の漁港港勢調査のデータを閲覧し、カメラに収める。また、福江島内の漁港のマップも入手した。市の水産課と振興局の水産課は同じ部屋に同居していた。

市役所本館の市の農林課と県振興局の農林課も同じフロアで向かい合っていた。壱岐島も同様に市と県の担当が同居していたが、長崎県では壱岐市と五島市が同じようなスタイルをとっているらしい。

福江島は、佐渡島、奄美大島、対馬島、屋久島、種子島に次いで第6番目に大きな島である（ただし北方領土と橋で本土とつながっている島を除く）。

2004（平成16）年まで福江市、富江町、岐宿町、三井楽町、玉之浦町の1市5町に分かれていたが、市町の合併によって五島市になった。福江島の周囲には合計11の有人離島が散在する。これらの属島は全て五島市に含まれる。一つの自治体が抱える有人離島数は五島市が全国で最も多い。これに次ぐのが沖縄県の竹富町の10島である。

1955（昭和30）年の国勢調査時の福江島の人口は75,954人であったが、その後年々減少し、2020（令和2）年には約32,000人となり、ピーク時の約4割に減少している。地区別では福江地区（旧福江市）に一極集中する傾向が顕著で、現在、福江島の人口の2/3が福江地区に集中している。残りの旧南松浦郡の町では富江地区が4,165人と最も多く、これに岐宿、三井楽、玉之浦と続く。一方、世帯数は1985（昭和60）年の20,473戸をピークに減少し続けており、2020（令和2）年は15,435戸であった。

なお五島市ではU I ターンの誘致に力を入れており、平成29年から令和2年度の5年間に984人がU I ターンし、そのうちの819人が定着しているので、定着率は83.2%になる。



福江港ターミナル（左）、五島市役所の建物（右）

五島観光歴史資料館

五島振興局から福江城跡の敷地内にある五島観光歴史資料館に行く。これまで2回ほど入館したことがあったが、世界遺産に指定されてから展示物が追加されていた。天守閣を模した鉄筋コンクリート3階建てである。窓口で山本二三美術館との共通券（500円）を購入して、中に入る。

入るとすぐに1階のハイビジョンシアターに連れていかれ、「バラモンの空」と題する市役所が制作したビデオを観せられた。このビデオは地元と転校してきた小学校高学年児童（ランドセルを背負っていたので小学生との設定だが、体つきは中学生のように見える）が、

バラモン凧づくりを通じて、福江の四季の風景や文化を紹介するストーリーで、上映時間は30分弱だった。ちなみにバラモン凧は福江島に古くから伝わる凧で、その絵柄は上部が鬼、中段が武者兜の後ろ姿、下段が嵐の中の渦をデザインしている。男子の初節句に子の成長を願って揚げる。凧の上部に風を切る糸が取り付けられていて、「うなり」を発生する。

ビデオを観てから2階の展示室を見る。五島の歴史や文化、信仰などに関する展示が時系列的に並べられている。五島列島には2万年前から人が住んでいて、縄文や弥生時代の遺跡が残る。鯨の骨やサメの歯などの化石が展示され、白浜貝塚と中島遺跡が紹介されていた。

倭寇、遣唐使、五島藩、伊能忠敬と測量中に五島で病死した坂部貞兵衛、福江城、五島焼（福江焼）、そして福江大火（昭和37年9月26日、被災戸数604戸、3,936人）、江戸時代の捕鯨などの展示が目をつけた。五島ではセミクジラ、ザトウクジラ、ナガスクジラ、コクジラが獲れたようで、荒川集落では昭和30年代まで捕鯨が続けられていた。また、福江島では三井楽、富江、黒瀬などに鯨を引き上げるロクロ場があった。五島藩の殿様は鯨で儲けた金で、大鎧をつくったそうだ。この他に磯漁業、沖漁業に分けてそれぞれ紹介されていた。

3階はキリシタン関係の資料展示で、世界遺産（「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」）に登録されたことを契機に追加したものである。展示は、Ⅰ. 五島キリシタン史と世界遺産の紹介、Ⅱ. 弾圧と潜伏、Ⅲ. 復活と教会建築の3つの部門に分かれている。



五島観光歴史資料館（左）、江戸時代の捕鯨に関する展示（右）

福江城址

福江城は五島列島全域を治めた五島藩（福江藩）の居城であった。五島家の始祖は宇久島に上陸した平家盛で、当初、宇久姓を名乗る。宇久家第8代の覚は1351（観応2）年に宇久島から福江島の岐宿に拠点に移し、さらに第9代の勝が福江に転居して、江川城（館）を築く。そして1587（天正15）年に第20代宇久純玄すみはるの代に五島姓に改えた。藩の成立は1603（慶長8）年のことで、純玄の嗣子・五島玄雅が徳川家康から1万5千石の所領を賜った。

その後、五島家の居城であった江川城（福江の市街地から空港に向かう坂の下にあった）は1614（慶長19）年に火災で焼失したため、現在の福江城にある石田浜に移り、石田陣屋が築かれた。しかしあくまでも「館」と呼ばれる建物で、城はなかった。

江戸時代後半になると異国船が日本周辺に出没するようになり、五島藩は幕府に築城を申し出る。しかしなかなか許可が下りなかった。1849（嘉永2）年になり異国船の襲来の備える必要が出てきたことから、築城の許可が下りた。許可は函館の五稜郭と同じ時期に出さ

れたらしい。五稜郭は許可後6～7年でできたが、この福江城は15年の歳月を要し1863（文久3）年に完成した。つまり、日本につくられた城の中では最も新しい城になる。

福江城は外堀と内堀が巡らされ、城内の敷地面積は約5.3haで、本丸、二の丸、三の丸、隠居所などがあつた。ただし天守閣はなかつた。石垣はいわゆる野面積みで自然石を積み上げている。福江城は3方が海に囲まれていることから海城として知られ、日本の城のなかでも珍しい存在であつた。

しかし、明治維新後の1872（明治5）年に解体された。つまり完成から解体までわずか9年に過ぎなかつた。明治維新後、第33代五島盛光（新発田藩から養子）は城の用地を五島中学に寄付しており、現在、城跡には県立五島高校が置かれている。なお、五島家第34代・五島盛輝は長崎の原爆で死亡している。2人とも子爵になり、貴族院議員であつた。



福江城の城門（左）、福江城の石垣（右）

武家屋敷通り

五島藩が成立してから31年後の1634（寛永11）年、第22代藩主五島盛利は家臣170余家を城下に集め、城下町を形成した。これを「福江直り」と称する。

現在もこの当時の武家屋敷通りが福江城址の南側に残っている。この一帯は中級武士が住んでいたらしい。上級武士は城の西側、現在の商店街の一带に住んでいたという。

武家屋敷通りは約400mの直線道路である。道の両側に石垣の塀が築かれ、塀の上には「こぼれ石」と呼ばれる丸い石が積まれている。この石は賊が塀を乗り越えて侵入しようとした際に崩れて侵入を妨げ、あるいは武器として使用されたと推定されている。塀の内側には民家が多く、実際に人が住んでいる家も目立つ。

武家屋敷通りの一番東側の松園邸は現在山本二三美術館になっている。不勉強で山本二三氏は存じ上げなかつたが、宮崎駿の「もののけ姫」などのアニメーション映画の美術監督として制作に携わった方ようだ。福江の出身だった縁で、邸宅を改造して彼の美術館ができた。アニメ作品の他にふるさとの風景を描いた「五島百景」の風景画も展示されていたが、なかなか精緻で、好印象の絵であつた。

この美術館の斜め向かいが、「武家屋敷通りふるさと館」である。この武家屋敷の門は薬医門と呼ばれ、この門をくぐると古い庭園がそのまま残る。ここは家臣の1人であつた藤原氏の屋敷跡だが、すでに家はない。館内には五島市を紹介する展示コーナー、バラモン風の絵付け体験などができる体験コーナー、喫茶コーナーなどがあるが、閉館ぎりぎりだったの

で、見るができなかった。庭には福江島には分布しないナンヨウスギの木が植えられていた。後にこの家を購入した人が台湾からもってきたものらしい。元の木は大木に成長してすでに枯れたため伐採されていたが、脇からでたヒコバエが数mの高さに成長していて、緑の葉がみずみずしく輝いていた。



400mの長さの福江武家屋敷通り（左）、武家屋敷通りふるさと館の石垣と薬医門（右）

市立図書館

従来の五島市立図書館は五島観光歴史資料館に隣接しており、過去に何回か行ったことがあった。その建物はそのまま残っていたが、資料館の人の話では新しい図書館ができて移動したとのことである。場所を聞き、閉館時間が18時というので、ふるさと館から急いで図書館に向かった。

新しい図書館は市役所に近い旧五島中央病院の跡地に建設され、今年の4月4日にオープンしたばかりである。RC平屋建ての斬新なデザインの建物で、天井が高く、前面は総ガラス張りで開放感がある。延べ床面積は2,300㎡で旧図書館よりもだいぶ広い。

郷土資料コーナーで五島の歴史関係の図書を閲覧する。平山徳一著（平成元年）「五島史と民俗」という本の一部をコピーする。この郷土資料コーナーの一角に久賀島出身で、朝日新聞の代表取締役専務を務めた内海紀雄さんが寄贈された蔵書が「内海コーナー」として置かれていた。主として離島に関する図書を中心に集められたもので、宮本常一の本も数多く置かれていた。さすがは新聞記者だっただけあって、膨大な図書を収集したものだと感じる。

閉館時間になったので、図書館を出て、近くにある「ラウンドイン」というホテルに入った。以前泊まったことのあるホテルだが、チェックインカウンターはなく、玄関の呼び出しボタンを押すとご主人とおぼしき人が出てきて2日分の宿賃を支払う。

夕食は近くの「葵」という店で刺身、五島牛のモツの野菜炒め、かつ丼を食べる。ビールを一杯飲み、後述する五島列島焼酎の麦焼酎を飲んだ。



市立五島図書館

令和5年4月20日

漁業協同組合

福江島の漁業協同組合は現在2つに再編されており、福江港北側の東浜にある。7時にホテルを出て、漁協のある場所を見に行った。基本的に旧福江市にあった漁協は久賀島と杵島を含め五島ふくえ漁協に、旧南松浦郡の富江町、玉之浦町、三井楽町、岐宿町の旧4町にあった漁協は五島漁協になっている。

事前に両漁協の住所を調べると同一であった。どちらかが間違いではないかと思っていたが、現地に行くと両漁協は歩いて1分以内のところであり、しかも東浜町の埋立地の中にあっただけで間違いではなかった。

どうせ合併するのならば、五島市内の漁協を一本化すべきだったのではないかと疑問に思い、近くを通りかかった古老の漁師に聞くと、両漁協の組合長は肌が合わなかったという。両人ともすでに亡くなっているが、当時のしこりが現在の職員にも未だに残っているとのことだった。

朝早く、漁協の事務所はまだ空いていなかったため、東浜の先端にある魚市場に出かけた。すでにセリは最終盤に入っていた。この魚市場の開設者は五島市で、卸売業者は(有)五島市福江魚市である。漁協及び支所は市場業務を行っていないので、五島市内で水揚げされた水産物のうち、生産者が直接長崎や福岡の市場に出荷するものを除くと、この魚市場に集荷されている。

市場への入荷は6時から9時ごろまで連続的に続き、順次、発声ゼリで売り先が決まっていく。仲買人は赤い帽子をかぶっているが、数えると20人ほどいた。島の需要は限られるので、仲買人の多くは島外に出荷する出荷仲買である。

最近、寂しい魚市場ばかり見ていたので、この日の入荷量は多く感じられた。しかし仲買人に聞くと、今日は少ないとのことだった。福江島は定置網漁業が中心だが、この他の漁業種類も比較的多いから、入荷している魚種は多岐にわたる。市場の脇では刺網で漁獲されたキビナゴの出荷準備が行われていた。この日のキビナゴの水揚量は通常は3トンほどであるが、約2トンとのことだった。その作業員の中にスリランカ人を見つけた。



五島漁協の事務所（左）、五島ふくえ漁協の事務所（右）

福江島の農業

魚市場を見学してから鬼岳半島を一周する。道路の両側には農地が続き、畑や田んぼが見

られ、麦は色づき、豊かな田園風景が続く。耕作放棄された農地はほとんど見当たらない。福江島は農業が盛んで、多種類の農作物がつくられており、多様性に富んでいる。

五島市の市勢要覧から、令和3年度の耕種別生産額を大きい順にみると、葉タバコが4.95億円で最も多く、第2位がブロッコリーの1.14億円、第3位がスナップエンドウの0.94億円である。以下、トマト(0.68億円)、高菜(0.62億円)、麦類(0.58億円)、米(0.56億円)、カボチャ(0.47億円)、キュウリ(0.32億円)、茶(0.28億円)、馬鈴薯(0.28億円)、ビワ、レタス、ゆで干し大根と続く。

葉タバコをつくる農家は離島に多いが、近年はタバコ需要の落ち込みで減反が進められ、大きな岐路に立たされている。ただ福江島の場合は、令和4、5年度ともに40戸が栽培しており、生産額は最も多く、農業の中心を成している。葉タバコの畑の脇には沖縄県でも見たことのある収穫用の車が置かれていた。

ブロッコリーはすでにかなり大きくなっており、もうすぐ収穫できそうである。関東地方に比べると気温が温かいためか早い。スナップエンドウも収穫時期を迎えているはずだが確認できなかった。ハウス栽培が中心なのかもしれない。トマト、カボチャ、キュウリはこれからだが、島内にはビニールハウスも目立つので、中で作られているかもしれない。意外だったのは茶である。新芽が芽吹き、これから茶摘みが始まろうとしていた。



葉タバコの畑(左)、ブロッコリーの畑(右)

崎山集落

県道165号は鬼岳半島の海岸沿いを回る。福江の市街地を離れて、最初の小さな集落が長手、続いて崎山の集落になる。崎山の集落は比較的大きく、崎山漁港(第4種)が整備され、また五島ふくえ漁協の崎山支所が置かれている。

漁港には船外機を含めて40隻強の漁船が係留されていた。製氷施設で氷を車に積み込んでいる老人がいたので、崎山地区の漁業の様子を聞く。

崎山はもともとイセエビを対象とする建網漁業が盛んであったという。現在は、比較的大きな船はシビ釣り(マグロ類)、小さな船がカツオ釣り(主としてハガツオ)を主な対象としているとのことだ。ただし高齢の漁師が多く、定年後漁師になった人が中心だという。ちなみに用地内にはタコツボがたくさん積んであった。

詳しい話は漁協事務所で聞くといいといわれ、県道脇の事務所に顔を出した。室内には2人の男性がおり、1人は高齢者で嘱託のようだ。しかし支所長と思しき人からは年度初めで

忙しいと取材を断られた。ちょっと話したところでは、どうもこの地区のメインの漁業は大型と小型の定置網のようだ。

集落内には白浜貝塚が見つかった。縄文後期から弥生前期（約 4,000～2,000 年前）のもので、この一帯は後述する溶岩海岸とは異なり、広大な砂丘地帯だったと案内板に書いてあった。縄文遺跡からは父子と思われる人骨が発掘されている。また鹿の角で作ったヤス、サメの歯の矢尻、鯨の骨を加工したアワビオコシなど多数の漁撈用具も見つかった。



五島ふくえ漁協の崎山支所（左）、崎山漁港に係留されている漁船（右）

鬼岳

塩津浦という小さな集落をすぎて、福江島を象徴する鬼岳（315m）に登る。

鬼岳の中腹から上部は森林が存在せず、草原と芝生に覆われている。通常は周囲から様々な植物の種子が飛来し、植生の遷移が進むものだが、鬼岳は手入れが行き届いていないおかげで植生の遷移が妨げられている。シカなどの植食性動物による食圧によって初期植生が維持される場合（宮城県の金華山の例）もあるが、このように遷移を妨げているのはまさに人間なのだ。

後にレンタカー会社の人に聞いたところでは、2年に1回の頻度で阿蘇山のように火入れをしているそうだ。こうして初期植生が人為的に維持されている。また展望台の周囲は芝生が広がっており、こちらはゴルフ場のように芝刈り機が導入されている。かくして福江島を象徴する特徴的な景観を維持しているわけだ。

鬼岳は11の玄武岩からなる単成火山で構成される鬼岳火山群の中心に位置している。この火山群は複数の溶岩流とスコリア（多孔質の岩滓で暗色のもの）堆積物でつくられている。このうち中心の鬼岳は約1万8千年前に噴出した最も新しい火山のようだ。

駐車場に車を停めて、急坂を登り展望台まで行った。東屋が整備されている。展望台からは福江の市街地や空港、背後の山々や島々を一望できる。鬼岳の周囲は畑だらけで、しかもそのほとんどは耕作されており、荒れているところは少ない。山の周囲にはゴルフ場やリゾートホテル、天文台などが見える。展望台の近くに鬼岳神社が置かれており、この周囲だけが木々で囲まれていた。芝生の草原には鳥が異様に多い。

展望台から鬼岳の火口までは7～800mほど歩かなければならないが、ただ草原が続くだけなので、登るのをやめにして駐車場に戻り、海岸に行くことにした。

鬼岳火山群から噴出した溶岩流が海に流れ込んで、一気に冷やされてできたのが^{あぶき}鑿瀨溶岩海岸である。海岸線の一面に環境省のビジターセンターが置かれているが、あいにく修繕のため休館中だった。センターの前の林を抜けると、展望台が整備されている。ここから海岸線を眺めた。黒い奇石の荒々しい海岸が連なる。人はちょっと近づけそうもない。沖には以前訪ねたことのある赤島、^{おうしま}黄島、黒島が横たわっていた。



福江島のシンボル・鬼岳山頂（左）、溶岩が張り出した鑿瀨溶岩海岸（右）

明星院

県道 165 号を西に走ると大浜の集落に入った。集落の前には大浜漁港（第 1 種）が整備されている。この漁港は小泊と浜の 2 地区に分かれる。集落を抜けて右折し、県道 49 号をいったん内陸部に向けて走り、明星院を訪ねる。

明星院は五島における真言宗の総本山で、藩主五島家代々の祈願寺であった。なんでも明星院の名称は空海が唐からの帰りに立ち寄った折、明け方の空に輝く星を瑞兆と名付けて名付けたらしい。806（大同元）年のことである。

本堂は五島家第 28 代の盛運が 1778（安永 7）年に再建したもので、檜柱 20 本からなるこの建物は五島列島最古の木造建築物である。本堂の天井には狩野派の画家で五島藩の絵師であった藤原玄能によって 121 枚の花鳥画が描かれている。約 350 年前の作品らしい。



明星院の本堂（左）、本堂の天井に描かれた花鳥画（右）

この本堂は日本遺産、「国境の島 老岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～」の構成文化財の 1 つである。日本遺産とは地域の歴史的な魅力や特色を通じてわが国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定したもので、明星院は 2015 年 4 月に認定されている。ちなみ

に福江島には、このほかに後述する「大宝寺」「三井楽」「ともづな石」の3つも構成要素となっている。

なお、この寺には国指定重要文化財の銅造如来立像や県指定有形文化財の木造阿弥陀如来立像があるらしいが、見ることはできなかった。

米と麦

明星院から来た道に戻り、海岸沿いの県道49号線を富江に向かう。

内陸部にはかなり広い農地があり、水田と麦畑が目立つ。福江島の農地は、旧福江市内の他に富江の半島部、三井楽の半島部、そして岐宿の山内盆地に集中している。

2020年の農林業センサスによると、五島市の経営耕地面積は3,072ha（販売農家）で、このうち田が1,125haで約1/3を占め、残りが畑である。一方、市勢要覧によれば、2021年の稲の作付面積は422ha、麦は小麦、二条大麦、裸麦の3種が栽培されており、作付面積は合計652haであった。上述したように米と麦を合わせた直近の生産額は約1億円である。

水田は、①すでに水が張られ田植えが終わったばかりの田、②代掻きがすみ田植えが始まろうとしている田、③昔ながらのレンゲが植えられこれから田起しを待つ田、④麦を収穫した後に耕耘する二毛作の田、の4通りに分かれている。このように多様な米の栽培形態によって、地域として気象災害等のリスク分散が結果として図られているのだろう。令和3年度の米の収量は1,670トンなので、基本的に島内での自給が可能である。なお、米は後述するように飼料米も作られている。

麦畑は、①すでに刈入れを終わった畑、②黄色く色づき収穫まじかの畑、③まだ緑色をしていて収穫までしばらく間がある畑に分かれている。恐らく品種による違いだと思われるが、麦に関する知識に乏しいのでよくわからない。

内陸部の集落を通過し、海岸沿いを走る県道49号線に出た。集落のはずれにかなり大きな自動車の教習所があった。県道からわき道を海に向かうと小さな河川の河口に増田漁港（第1種）が整備されていた。この漁港には漁船2、船外機7隻が係留されていた。



刈入れが終わった麦畑（左）、レンゲが植えられた田んぼ（右）

富江地区

増田の小さな集落から県道49号に戻り、増田トンネルを抜けると旧富江町になる。境界線の場所は「牛瀬・馬瀬」と呼ばれている。旧富江町は富江藩の領地だったので、ここが五

島藩との境界だった。道路脇に境界線が決められた経緯を書いた立て札が立っていた。これによると、それぞれの藩から、五島藩は馬に乗って、富江藩は牛に乗って出発し、出会った場所を境界線としたとのことである。馬の方がはるかに速いから、福江藩の領地の方は当然広くなったのである。

富江藩がつくられた経緯を述べておこう。幼少で家督を継いだ第24代盛勝を5年間にわたり後見役として支えたのが叔父の盛清（第22代盛利の3男）であった。その功績が認められて石高3,000石の富江領とした独立した。時に1661（寛文元）年のことであった。翌年、陣屋を建築し、合わせて江戸屋敷も設けている。五島藩同様に城はなかった。なお、富江藩の領地は旧富江町の全域の他に、宇久島の神浦、中通島の青方、魚目、柘島であり、飛び地として分散していた。富江藩は主に異国船の監視にあたり、第8代盛明まで約200年間続いた。

富江藩の陣屋屋敷はおよそ3町歩ほどの広さがあり、敷地内に年貢を保管する石蔵も置かれていた。この石蔵は旧役場庁舎近くに今でも現存している。石材は富江産の玄武岩が使われ、壁の厚さは115cmに及ぶ頑丈な建物である。



只狩山展望台から見た富江の市街地（左）、富江藩の陣屋石蔵跡（右）

畜産業

11時に旧富江町に入った。富江地区の最初の集落が田尾だ。3月末の住基台帳上の人口は93人（61戸）であり、小さな集落である。

田尾の集落から600～700mほど進んだ橋の下に大規模な養豚場があった。(有)草野ファームという。谷底地形で、谷に沿って50mほどの細長い豚舎が14～15棟並んでいた。五島列島最大の養豚業者で、同社のホームページによると、母豚1,200頭を一貫生産しているようだ。ちなみに福江島の養豚業者は5経営体で、このうち法人経営が3経営体あるが、ダントツの生産量を誇るのが、この草野ファームである。

谷底からは養豚場特有の悪臭が漂っているが、周辺に人家はないから、文句を言われることが少ないのであろう。人口の少ない島の特性が活かされている。

ここまで来る間にいくつかの黒牛の繁殖農家を見てきているが、福江島の畜産業のメインは肉用牛の繁殖である。福江島には約250戸の繁殖農家があり、母牛の飼養総数は約5,000頭だから、1戸当たりの平均飼養頭数は約20頭になる。年間の子牛の出荷量は約3,500頭に及ぶ。後述するように子牛のセリ場が島内にあり、隔月の奇数月に市が開かれ、基本的に

島外の肥育農家に販売されている。子牛の相場は多少回復傾向にあり、現在は平均 60 万円前後なので、年間の子牛生産額は約 20 億円前後と推定され、福江島の最も重要な産業になっている。

なおJAは島内の3ヶ所に肥育センターを有し、島内で肥育した牛肉を「五島牛」のブランドで年間 400 頭前後を出荷している。

黒毛和牛の餌は基本的に島内で生産した牧草である。したがって島内には牧草地が目立つ。また飼料米も生産しており、WC Sの栽培面積は約 400ha に及ぶ（補助金は8万円／反）。また飼料米が 25.5ha で栽培されている（補助金 5.5 万円／反）。



草野ファームの養豚場（左）、黒牛の繁殖農家の牛舎（右）

宝石サンゴ

富江の市街地に入っすぐのところに出口サンゴ資料館があった。1階は展示資料室を準備中とのことで、2階に宝石サンゴとサンゴ関連の商品は陳列されていた。ご主人は亡くなられたとのことで、奥さんが内部を案内してくれた。働いていた職人は健在とのことで、今でもサンゴの細工を行っているという。1階には展示室を設ける予定だが、依頼している大工が忙しく、工事が進展していないとぼやいていた。

富江地区のシンボルマークは宝石サンゴである。案内板を含め、いたるところに赤いサンゴのマークが使われている。

1886年（明治19）年に男女群島沖で宝石サンゴが発見されると、富江を中心に福江島の漁師が大挙して出漁するようになる。そして1891（明治24）年には富江のサンゴ漁船50隻が遭難し、うち27隻が沈没するという大惨事が発生、その後も海難事故が相次いだ。しかし高価な宝石サンゴ漁は続く。

宝石サンゴを採り始めた翌年には地元でサンゴの加工が始まった。当初は玉の製品に限定されていたが、1905（明治38）年ごろになると加工技術も進歩し、高価な彫刻が地元の職人によって作られるようになる。大正初期には富江在住の職人は250人に達していたらしい。このようにサンゴ漁業と宝石加工が連携しながら富江地区の地場産業を形成していったのであった。

しかし男女群島の宝石サンゴの資源が枯渇して来ると、採取船は台湾に基地を移したため、加工職人も台湾や神戸方面に移り、富江地区の宝石サンゴ加工は衰退していく。それでも出口さんのところは、技術を守り、令和の今日までサンゴ細工を維持してきたのだった。

なお、現在も五島黒瀬沖や東シナ海の男女群島海域では、細々とサンゴ船が操業している。長崎県における宝石サンゴの許可枠は5経営体で、全て福江島に配分されている。漁協の支所別では、富江支所が3経営体、玉之浦支所が1経営体、三井楽支所が1経営体という内訳である。

出口サンゴ資料館の隣接地に「たっしゅかランド」という富江温泉センターがあった。しかしボイラーの故障で閉鎖中であった。



宝石サンゴの加工品（左）、展示されていた宝石サンゴの原料（右）

五島漁協富江支所

富江地区の市街地に入り、国道 384 号の起点を左折したところに山戸海産という水産加工所があった。中をのぞいてヒジキとトサカノリを購入した。この加工場ではミズイカのスルメや一夜干し、カラスミなども製造している。対応してくれた奥さんは嫁いできて30年になるそうだが、御主人のおじいさんの代に操業したというからかなりの老舗である。

漁船の泊地は、この山戸海産に近い入江と反対側の漁協支所の側の2ヶ所に分かっている。漁船数はかなり多く、両方の泊地を併せて50~60隻の漁船が係留されていた。

山戸海産の前の道を直進すると、先端部は埋立地になっており、そこは魚礁建設のヤードとなっていた。高さ20m以上はあると思われる鋼鉄製魚礁が3基並び、周囲には大量の間伐材が積み上げられていた。

続いて富江漁協富江支所を訪ねて話を聞く。富江地区にはかつて富江漁協と黒瀬漁協の2つの漁協があったが、1997（平成9）年に両漁協とも五島漁協に合併している。

五島漁協の正組合員は399人、准を含めると961人である。このうちの1/4ほどを富江地区が占め、正組合員は100名ほどである。ただ正組合員に限れば三井楽支所の方が少し多いという。

富江地区で営まれている漁業は曳縄と一本釣りがメインである。この他に刺網、小型定置網、延縄なども営まれている。曳縄の漁獲対象はヨコワが主体で、漁獲実績があることから、クロマグロの漁獲枠は多いそうだ。一本釣りはカツオ類（ハガツオとスマで、本カツオは少ない）とチカメキントキが主な対象魚である。延縄ではクエを獲っているが、三井楽と岐宿の方が多そう。なおクエの稚魚放流を毎年1~2万尾しており、資源は増えている。放流種苗は五島栽培漁業センターが生産をやめてからは、県漁連を通じて長崎県が生産した種苗を放流している。

富江島は近年磯焼けが著しく、磯根漁業はほとんど成り立たなくなっているが、五島市が窓口となり「ブルーカーボン事業」に取り組み始めており、藻場回復の兆しが見えてきたという。岐宿、崎山、玉之浦では藻場が一部回復したようだ。富江地区でも今年度から水産庁の水産多面的機能事業を活用して藻場の保護育成に取り組む予定である。ただ、既存の活動組織が優先され、富江地区の予算（125万円）は少ないと嘆いておられた。

支所には地元の仲買人もいて、受託出荷も行っており、長崎県漁連経由で出荷するケースもある。少量の場合は福江市魚市場にも出荷する。何れのケースも漁業者の販売手数料率の合計は同率になるように調整されている。



五島漁協富江支所（左）、富江港内に係留されている漁船（右）

只狩山展望台

漁協で話を聞いてから、山戸海産の前にある「大正閣」という食堂で長崎皿うどんを食べる。続いて上述した富江藩陣屋の石蔵の見学する。幅 25m、長さ 9 m、高さ 4 m の蔵で、玄武岩の切石を積んだ頑丈なものだ。今でも天井部分を除いて当時のまま残っている。この蔵には米をはじめとする穀物類が貯蔵されていた。

そこから只狩山に向かった。只狩山（標高 84m）は富江半島の付け根付近のほぼ中央部に位置する小さな山で、そのてっぺんに展望台が置かれている。渦巻き状の階段を登って展望台のてっぺんに立つと、富江地区をほぼ一望できる。

展望台の下には、小説家・新田次郎の小説「珊瑚」を記念した「新田次郎先生・珊瑚之碑」と書かれた石碑が立っていた。上述したように男女群島に出漁していたサンゴ採集船が 1906（明治 39）年に台風により少なくとも 700 人以上が遭難する痛ましい事故が起きているが、この歴史上稀有な事故のことを气象台にいた時に富江島出身の同僚から聞き、興味をもった新田が小説にしたものである。

その石碑の隣には、1977（昭和 52）年に航空自衛隊員が訓練中に富江南方海上で墜落した 2 名の隊員の「殉職の碑」も置かれていた。

半島の東側を南下して、倭寇がこもったといわれる岩屋のある勘次ヶ城跡に行く。途中漁港らしきものがあったが、船は船外機が 1 隻だけ。城跡では地元の人 5 人ほどが草刈をしていた。

ここでカメラを道路に落としてしまい、液晶の画面にひびが入り、画面は網の目がかかったようになる。念のためにスマホと落としたカメラで同じ画面を併撮することになった。夜、

ホテルに戻って確認すると写真そのものは正常だったので、翌日はひびの入ったカメラを使い続けた。

続いて島の最南端にあたる笠山灯台に行く。



富江地区を一望にできる只狩山の展望台（左）、新田次郎の小説「珊瑚」の記念碑（右）

黒瀬漁港と小さな集落

島には数少ない国道が福江島には通っている。国道 384 号である。国道の起点は五島市役所富江支所の前あたりで、福江島をほぼ一周して福江港に至る。その後、航路を経て、中通島を通り、本土の佐世保まで続く。

富江半島を一周して国道 384 号に入るとすぐに黒瀬の集落に入った。黒瀬の3月末の住基台帳上の人口は 389 人（246 戸）であり、過疎化が進行している。

黒瀬漁港（第 1 種）には漁船 16 隻、船外機 24 隻が置かれ、船が比較的多い漁港である。サンゴ採りの船と思われる大きな漁船もあった。以前高知県でみた宝石サンゴ採取漁船とは異なり、この漁船は甲板にローラーのようなものが 4 対並び、網に掛かった宝石サンゴをこのローラーで外し、下のプラスチック製の籠に受ける構造になっていた。

黒瀬を過ぎて国道を西に進むと、丸子という小さな集落が現れた。ここを過ぎると曲がりくねった道になり、家は一軒もない。6～7kmほど進むと、谷あいには鯉のぼりを掲げた小さな集落が現れた。長峰・琴石の集落だ。現在子供は皆無だろうから、各家に残っていた鯉のぼりをかき集めて掲げているのだろう。集落と海の間には農地があったと思われるが、耕作放棄され草が生い茂る。下の平地が田で、両脇の斜面が段々畑だったと思われる、1 面だけ田んぼに水が張られ、すでに稲の苗が植えられていた。

この先に長峰・太田の集落があり、ここが富江地区の最西端の集落になる。長峰は琴石と太田を併せて 111 人（76 戸）しか住んでいない。

なお、富江の集落は富江半島と海岸沿いにあるが、唯一内陸部にあるのが後述する繁敷の集落である。この集落は、五島家 28 代当主五島盛運もりゆきが 1772（安永 2）年に大村藩からの移住奨励策を進めたことに応じて移住した人々を祖先に持つ。ちなみに福江島の各地に同じような移住集落があり、これらの集落は大村藩で迫害を受けたキリシタンであった。しかし外国人宣教師追放後は、本来のキリスト教とは異なる土着・変質したカクレキリシタンになった。そのうちの一部は明治維新後、復活キリシタンになり、教会を建てた。つまり福江島の教会の多くはこうした歴史的背景を有しているのである。



黒瀬漁港の全景（左）、富江地区の西端の集落・長峰（右）

玉之浦地区

玉之浦地区は福江島の南東端に位置する。

富江地区の長峰・太田集落を過ぎると玉之浦地区に入る。最初の集落が大宝であり、こちらは外海（東シナ海）に面している。この大宝の集落は例外的存在で、その他の玉之浦の集落は何れも島山島によって囲まれた玉之浦湾に面している。

玉之浦湾は島山島北端の入口から立石まで約 12km に及ぶきわめて深い入江であり、多数の支谷の小湾があり複雑である。北北西～南南東と北東～南西の二方向をもつ岬や湾入の発達が著しい。

玉之浦地区の中心集落は福江島の最西端に位置する玉之浦である。築口瀬戸を挟んだ対岸は島山島だ。島山島には 2015（平成 27）年に訪れており、玉之浦に来るのは 2 回目になる。当時書いた島山島の覚書と若干重複するが、玉之浦の歴史を簡単に紹介しておこう。

玉之浦は天然の良港でしかも東シナ海の漁場に近いという条件を備えていたので、漁業の根拠地となり、島外からの出稼ぎ漁船によって発展した。1867（明治 30）年ごろには、伊予、土佐方面からカツオ釣漁船が来るようになり、玉之浦には魚問屋や鰹節製造の関連産業が立地して人が集まり、にぎやかになった。その後、男女群島や鳥島での宝石サンゴ漁業、さらに大正初期になると徳島県からレンコダイやアマダイなどの延縄漁船が大挙して来るようになり、豊漁が続いた。さらに大正末期にはこれらの魚を底曳網（手繰漁船）で獲るようになり、東シナ海の底曳網船団の根拠地として全国各地から漁船や乗組員が集中、繁栄を極めた。

しかしこの繁栄は昭和初期を頂点として次第に衰微し、手繰漁船はほとんど姿を消してしまった。これは手繰漁船の増加、大型化、装備の近代化によって玉之浦が対応しきれなくなったことと、玉之浦の仲買人を経由しないで直接本土での販売ルートが確立したことにより、拠点となる漁業基地が、長崎市、福岡市、戸畑、下関市へと移っていったためである。かくして栄華を極めた玉之浦は僻地の小漁村に戻った。

戦後は地元漁民による男女群島周辺での一本釣りや延縄などの漁船漁業に加え、玉之浦湾内では真珠養殖も始まっている。しかし 1965 年からの真珠不況で真珠養殖業者は撤退、漁船漁業が不振になると、漁業者の多くは漁業からマダイ養殖に転換し、湾内では魚類養殖が盛んになる。ただこちらも長続きせず、現在では魚類養殖業者はほとんど撤退し、後述す

る外部資本によるクロマグロの養殖地帯へと変貌している。

地区内には 11 の集落があり、旧役場があった玉之浦集落が最も人口が多く、これに大宝、荒川の集落が続き、この 3 集落以外の集落の人口は 100 名にも満たない。

大宝漁港

玉之浦地区の最初の集落が大宝である。この集落は外洋に面していて、前面に大宝漁港（第 1 種）が整備されている。3 月末の住基台帳上の人口は 203 人（119 戸）で、玉之浦地区の中では 2 番目に大きな集落である。

漁港を望む堤防の上に大平内閣で郵政大臣を務めたことのある白浜仁吉の顕彰碑がたっていた。新上五島町の若松島出身の白浜は、慈恵会医大を卒業後、軍医となり、長崎で被爆。その後、故郷に帰り、県議を経て衆議院議員を 12 期務めた。実家が漁師であったことから、漁業・離島には思い入れが深かったようで、「離島振興の慈父」と慕われ、漁港整備にも尽力したのだった。

漁港にはデリックを備えた定置網の漁船が 3 隻と通常の漁船が 3 隻係留されていた。また漁港の奥には漁船 7 隻と船外機 8 隻が置かれていた。大宝漁港の最近の陸揚量は定置網が最も多く、これに一本釣りが続き、年間 200 トン前後である。

もともと漁業者は大宝漁協を組織していたが合併により五島漁協玉之浦支所となり、同支所の出張所として存続していた。しかし事務所の老朽化に伴い職員の巡回出張に代わり、現在、事務所は廃止されている。



大宝の集落と漁港（左）、白浜仁吉氏の顕彰碑（右）

大宝寺

大宝漁港の背後に集落の規模には不釣り合いなほど立派な寺がある。大宝寺といい、「西の高野山」とも称されているらしい。この寺も上述した明星院本堂と共に日本遺産の構成要素の一つとして追加認定されている。

大宝寺は、701 年（大宝元）年に日本にやってきた中国の三論宗の僧・道融和尚が創建したと伝えられる五島列島最古の寺であり、第 41 代持統天皇（645～703 年）の勅願寺とされた。

その後、806 年（大同元）年に、遣唐使に随行していた空海が唐から帰国の際に大宝寺の付近に漂着し、国内初となる真言密教の講釈を行ったとされ、三論宗を真言宗に改宗させた

といわれている。このため、真言宗総本山の高野山に対し、大宝寺を西の高野山と呼ぶようになったとのことだ。

今でこそ、人口 200 人の寒村になっているが、もともと大陸に向かって開かれた先進地で、当時は大きな集落を形成していたのであろう。



大宝寺の山門（左）、大宝寺の本堂（右）

五島漁協玉之浦支所

国道 384 号から県道 50 号に入る。旧玉之浦町の中心は玉之浦湾の先端に位置する。トンネルを抜けて、最初に現れたのが井持浦の集落で、ここには町立診療所があった。

その先に井持浦教会、ルルドの聖母が坂の上にある。教会は 1897（明治 30）年にレンガ造りで建てられた。1 組の老夫婦が観光に訪れていた。観光客の五島観光の目当てはたいてい教会なのだが、歴史的に極めて新しい教会が寺社仏閣よりも注目されるのは不思議である。道路を隔てた海側に玉之浦カントリーパークがあった。

その井持浦の隣が井持の集落で、最西端の集落である玉之浦が隣接している。玉之浦の集落には郵便局、役場の支所、漁協の支所などが置かれている。3 月末の住基台帳上の人口は 447 人（273 戸）で、玉之浦地区最大の集落になる。その先の橋を渡ると以前行ったことのある島山島になる。島には今でも鹿が多く生息するとのことだ。

漁協の前で数人が働いていた。2 階の事務所に上がると、女性事務員 1 人と支所長がいた。支所長は最近、富江支所から移動になったという。支所長に漁業の現状を取材する。

旧玉之浦町には玉之浦漁協と大宝漁協の 2 つの漁協があり、荒川の集落には玉之浦漁協の出張所があった。1997（平成 9）年に五島漁協と合併して同漁協の支所となり、現在に至る。支所の正組合員は玉之浦が約 60 人、大宝が約 20 人の合計 80 人ほどである。また職員数は 8 人とのことだ。

玉之浦支所はちょっと前まで魚類養殖業が盛んであったが、現在はほとんどの組合員が廃業し、定置網を中心に営んでいる。魚類養殖は、後述するように外部資本によるクロマグロ養殖だけだ。

定置網は大型定置網が 6～7 経営体、小型定置網はそれ以上あるとのこと。漁協自営の定置網はなく、全て会社ないしは個人の経営である。定置網は台風の時期に網を揚げる程度で基本は周年操業している。定置網の主力魚種は、ブリ類であるが、今年はブリが獲れず漁獲が思わしくないという。

定置網以外では、一本釣り、曳縄釣り、延縄、刺網などが営まれている。一本釣りは14～15 経営体が営む。ヨコワ、マダイ、カツオ類（スマとハガツオが中心）が主な漁獲対象である。一本釣り漁業を営む漁師は他の漁船漁業も兼業しているとのことだ。なお宝石サンゴを採取する漁船は荒川の集落に1 隻いる。

漁獲物の出荷先は長崎魚市などの島外と、福江魚市である。



玉之浦港と五島漁協玉之浦支所（左）、五島市玉之浦支所（右）

玉之浦湾の南側は切り立った断崖が続く。その西の端が大瀬崎で、ここに灯台と展望所があるが、以前行ったことがあるので省略し、県道に戻り、国道に出る。玉之浦湾沿いを北上する。中須、布浦を経て、荒川に向かった。布浦にはかつての国営栽培漁業センターが国立研究開発法人水産研究・教育機構の五島庁舎に衣替えして残っていた。

荒川温泉

荒川の集落は玉之浦湾の入口近くの支湾の奥に位置し、集落の前に荒川漁港（第4種）が整備されている。避難港であり、東シナ海で操業する漁船が多かった時代は同海域で操業する漁船の避難港としてにぎわいを見せていた。台風時には200～300 隻もの漁船が避難し、ごったがえしていたこともある。港内における漁船繫留の位置は決められていたようだ。最盛期には底曳網漁船70 隻、レンコダイの延縄漁船20 隻が所狭しと岸壁に並んだ光景が写真に残されている。今や過去の話であるが、それほど荒川漁港は重要な位置を占めていた。

また、昭和30年代まで五島捕鯨の基地（解体処理場）があり、大洋漁業と日東捕鯨の2社が操業していた。さらに戦後すぐに長崎と五島を結ぶ航路が開かれており、今はさびれてしまった荒川の集落であるが、かつては重要な港の一つであった。

このように荒川は東シナ海で操業する漁船の休憩地であり、避難場所であった。しかも温泉があったことから、大正期には12軒の旅館があり、戦後も7軒残っていた。これらの旅館は売春宿を兼ねていて、1軒に6～7人の酌婦がいたという。赤線が廃止された1958（昭和33）年でも6軒の宿があった。しかし東シナ海の漁業の衰退で、五島で一番酒が売れたという荒川の集落も衰退の一途を辿り、今や空き家が目立っている。

荒川温泉には島山島を訪れた帰りに竹之家という旅館に泊まっている。この時は随分豪華な海の幸を堪能したが、今回は泊まらずに、温泉だけに浸かった。ちなみに温泉は1913（大正2）年に地元の少年によって発見されている。西海国立公園唯一の温泉で、源泉温度

65.6℃なので、加水して 43℃に下げている。泉質は、塩化ナトリウム、カルシウム塩であるが、海水よりも塩分は低い。



荒川温泉の外観（左）、荒川温泉の浴槽（右）

ツナドリーム五島

荒川沖の玉之浦湾内にはクロマグロ養殖の大きな円形生簀が並ぶ。荒川の集落には㈱ツナドリーム五島と(有)新海養魚がクロマグロを養殖している。㈱ツナドリーム五島は豊田通商の系列で、近畿大学と連携して同大学が種苗生産技術確立した人工種苗の量産と完全養殖をめざしている。一方の(有)新海養魚は岐宿に本社のある五島水産㈱の子会社らしい。

2社の作業場のある港には近代的装置を備えた給餌船が停泊しており、ちょうど就業を終えた従業員 20 人ほどが帰路につくところだった。漁港用地には生簀の固定に使う土嚢が山のように積まれていた。

矢の口の集落を経て、荒川トンネルを抜けると、ツナドリーム五島㈱の種苗生産施設がある。近畿大学と豊田通商㈱が連携してクロマグロの種苗生産に取り組む施設で、2015 年 7 月にオープンした。

2015 年 11 月に見た時には工事中だったが、少し高台にある種苗生産施設の下段の整備はほぼ終わっていた。沖合の防波堤は完成し、埋立造成された用地の先にポンツーンが浮いている。ただ用地は未舗装であり、まだ使われている様子は見られなかったが、近々、荒川漁港から、こちらに拠点が移されることになるのだろう。



荒川地先のクロマグロ養殖施設（左）、ツナドリームのクロマグロ種苗生産施設（右）

福江島はクロマグロの養殖がさかんで、五島ふくえ管内の奥浦の集落には、金子産業㈱と

大洋エーアンドエフ(株)の養殖場がある。前者はニッスイ、後者マルハニチロ(株)の子会社である。ちなみに五島市マグロ養殖産地協議会なる組織がつくられ、五島市内（福江島の他に奈留島、杣島を含む）で市内産養殖マグロを食べさせる飲食店5店と小売店2店を紹介するパンフレットがつくられている。

令和5年4月21日

魚市場

昨日はセリの終盤にさしかかっていたので、この日は少し早くホテルを出て、6時40分ごろに魚市場に着いた。すでにセリが始まっていた。この市場の開設者は五島市、卸売会社は(有)五島市福江魚市場である。従業員は8人（正3人、パート5人）で、年間の売上金額は10億円前後で推移している。市場の面積は323.51㎡で、卸売会社の裏は仲買人の事務所になっている。まともな事務所は少なく、大部分がスチロール製の魚箱の保管庫になっていた。

同市場の集荷範囲は、福江島島内の五島漁協と五島ふくえ漁協である。福江島内は次の5つの陸送ルートで市場に搬入されている。

水ノ浦漁港→魚市場

万葉漁港、五島西漁港→魚市場

玉ノ浦港→大宝漁港→荒川漁港→魚市場

黒瀬漁港、山下漁港、倭寇漁港→富江港→魚市場

大浜漁港→鬼岳漁港→崎山漁港→魚市場

久賀島と杣島の2次離島からは漁業者が直接漁船で直接市場に搬入する。定置網と釣り物が中心である。

荷捌場には魚種別に整理され、発泡スチロール箱に収容した魚が床に並ぶ。これらを1箱ずつ発声セリによって売買している。

イサキ、アジ、オコゼ、タイ、トサカノリ、シビ、メジ、ミズイカ、キビナゴ、ブリ、サザエ、クロムツ、カサゴ、サメなどが見られ、魚種は豊富である。

船着場には久賀島からの漁船が横付けされ、水揚げ作業をしていた。小型定置網の漁船の上では漁師が神経メをしていた。



福江魚市場のセリ風景、赤い帽子が仲買人（左）、神経メをする久賀島から来た小型定置網の漁師

アラカブの延縄漁船と夫婦で刺網を操業しクロ（メジナ）を水揚げした夫婦船が魚市場前のポンツーンに船を係留していた。夫婦船の漁師は、3時半に港をでて網を揚げてきたとの

ことだった。すでに陸揚げを終えていたもう 1 人の小型定置網の人に話を聞く。小型定置網は箱式と、ツボ式があり、前者が手で揚網し網に入ったものを全部水揚げするのに対し、後者はツボに入ったものだけを漁獲するので量的には少ないという。話を聞いた人は後者のツボ網の漁師で、今年は漁が少ないとのことだった。

漁港の周りには細くて長い脚のアオサギが異様に多い。水揚げされた魚をねらっており、丸ごと飲み込んでいた。

この市場の特徴は魚種がかなり豊富なことだ。仲買人は 20 社ほどで、出荷仲買が多く、彼らは荷捌き場の周辺で作業をしている人もいる。魚は 9 時ごろまで順次入荷するので、仲買業者はその間の入荷を待っていなければならないから、長時間の対応となる。

食肉センターとセリ場

魚市場に続いて J A の食肉センターを見に行った。J A ごとうの本所から国道 384 号を北側に行ったところにある。

福江島では黒毛和牛の繁殖の他に、J A ごとうが中心になって肥育も行なわれている。島内の 3ヶ所に肥育センターがあり、「五島牛」のブランドで販売している。生きたまま島外に出荷するわけにはいかないので、島内で屠畜する必要があり、この食肉センターを整備したものだ。

ここでは年間 400 頭前後の黒毛和牛と出産を終えた廃牛 200 頭前後を屠畜している。J A 販売部は枝肉や部分肉として販売している。ただ島内の需要は限られるため、屠畜された和牛の大部分は主として枝肉として佐世保食肉センターに出荷されている。この食肉センターの隣が子牛のセリ場になっており、奇数月に開場する。

国道沿いのローソンで牛乳とポテトサンド、ハッシュポテトを購入して、車内で朝食を済ませた。福江島を横断する県道 27 号に入り、玉之浦地区の荒川に向かう。途中、五島中央病院という大きな病院があった。



J A 食肉センター（左）、牛のセリ場（右）

繁敷ダム

猪掛トンネルを抜けると、二里木田川の流域に出る。川沿いの道路を上り、雨通宿と二里木場の集落を過ぎ、橋を越えると一旦、岐宿町に入る。

二里木田川の上流に繁敷ダムがある。こちらは富江地区が張り出した部分に相当する。こ

のダムは1973（昭和48）年10月に着工して、5年後の1977（昭和52）年11月に竣工した。県営畑地帯総合土地改良事業の一環として整備されたもので、下流の山内盆地の農業用灌漑用水の確保を目的としている。中心コア型ダム（ロックフィルダム）で高さ27m、長さ105mで、有効貯水量は149万トンとのことだ。このダムの上流に富江地区で唯一の山村である繁敷集落があるようだが、時間の関係で省略した。住基台帳上の人口は18人（12戸）だから限界集落に近い。ここは上述したようで本土の外海地区から移住したカクレキリシタンの集落で、かつて教会があった。



繁敷ダムのダム湖（左）、ダムの堤体（右）

県道27号に戻り、再び岐宿地区に入る。山内盆地の南端の山内地区に相当し、田園風景が広がる。すでに田には水が張られ、田植えの準備が整っていた。長崎県一長いという直線道路をまっすぐに西に向けて走る。盆地の西側には七つ岳がそびえる。「日本のしま山百選」や「九州百名山」に選ばれているこの山は三角に尖った頂が美しい。直線道路の西端に七つ岳の登山口があり、その入口に循環式水洗方式のトイレが備えられていた。このトイレは常時水量豊かな水が流れており、沢水かと勘違いしたほどだ。

ここを過ぎると玉の浦地区になり、9時08分に国道384号と合流した。ここからは昨日走った道になる。

三井楽地区

頓泊トンネルを抜けると、三井楽地区に入る。トンネルの先に高浜海水浴場があり、白い砂浜が美しい。この高浜海岸は国交省の「日本の渚百選」に選ばれている。

三井楽地区は福江島の北西端から東シナ海に突き出た半島域に相当する。約30万年前に半島中央部の京ノ岳（182.7m）から噴出した溶岩流が放射状に広がり、溶岩台地を形成した。半島の形成と対岸の嵯峨島さかのしまの誕生は同時期だった。

京ノ岳の頂上には航空自衛隊のレーダー基地が置かれている。戦時中、西部防衛隊の前線基地として陸軍の防衛隊が駐屯していたが、1949（昭和24）年に米軍が接收した。その後、1959（昭和34）年に日本側に移管され、現在に至る。

三井楽地区は嵯峨島を除くと、11の集落で構成されるが、役場支所のある濱ノ畔集落に住む人が圧倒的に多く、令和5年3月末の住基台帳上の人口は1,527人で全体の64%を占めている。

三井楽地区の産業は台地上で営まれる農業と漁業である。円畑まるはたと呼ばれる防風林に囲ま

れた農地が台地のほとんどを占めており、農業が盛んだ。円畑は牧草や麦畑が中心で、麦は色づいていた。一方、三井楽半島の海岸沿いには波砂間（第1種）、塩水（第1種）、柏（第1種）、高崎（第1種）、後網（第1種）、八ノ川（第1種）、三井楽（第2種）の7つの漁港と、浜窄港、淵ノ元の2つの地方港湾があり、漁業も盛んである。

国道から半島域を一周する県道 233 号（貝津岳浜ノ畔線）に入る。この半島域を循環する三井楽半島バス（コミュニティバス）が、三井楽タクシー（車種：ハイエース）によって運行されている。



京ノ岳山頂に置かれている航空自衛隊のレーダー基地（左）、三井楽の集落（右）

三井楽集落の西海岸の最初の集落が貝津である。貝津の集落からは嵯峨島に行く船が発着しており、2015（平成 27）年に嵯峨島に出かけた時に貝塚の集落を訪れたことがある。

円畑と定置網

貝津から県道 233 号に入ると、地元で円畑とよぶ畑が連なる。円畑というのは円や楕円、あるいは四角い形をした畑で、周囲を溶岩で囲い、その上に主として樺の木が植えられ、防風林の役割を果たしている。航空写真を見ると、直径 50m ほどの無数の畑が連続している。

円畑は福江島の各地にあったようだが、土地改良が進み、その多くは消失してしまい、三井楽に例外的に残っている。狭い区画だと機械化に対応するのが難しく、土地改良をするに越したことはないが、三井楽は島の北西に位置し、季節風の影響を強く受けるため、防風は不可欠であることから円畑が維持されたものと推定される。

貝津の次の集落は浜窄^{はまさこ}の集落である。浜窄港に降りていくと、港で漁船を修理している人がいたので、話を聞いた。この集落はかつてイセエビを対象とする刺網がさかんだったが、近年、イセエビが少なくなっており、現在は一本釣りを兼業しているという。今年は時化が多く、出漁できない日が多いと言っていた。この船の先に3隻の漁船が係留されていたが、イカ釣り、曳釣り、延縄を兼業する漁船で、クエの延縄も営むらしい。

浜窄港から県道に戻ると、円畑で、機械を使って刈り取った牧草を「天地返し」している人がいた。牧草を早く乾かすための作業で、このような機械があることを始めて知った。3日間天地返しを繰り返し、その後、ロールサイレージにするという。生のままでも品質上の問題はないが、重いため3日間乾燥させるのだそうだ。この人は牛を60頭飼養し、毎年50頭ほどの子牛を出荷する島では比較的大きな農家であった。

波砂間の集落を抜け、丑ノ浦と塩水の集落に入る。塩水漁港（第1種）では定置網の網を

クレーンで引き上げ、トラックから降ろしているところだった。この漁港には10トン未満の漁船が3隻とこれよりも小さな漁船が1隻、合わせて4隻が係留されていた。三井楽の漁業は後述するように定置網が中心である。三井楽半島の周囲にはほぼ等間隔で大型及び小型定置網が置かれている。



円畑で刈り取った牧草を天地返しする機械（左）、塩水漁港での定置網の積み下ろし作業（右）

塩水集落のはずれの海岸に現地で「スケアン」と呼ぶ石干見漁業の遺跡が残っていた。小さな湾の入り口に高さ1～1.5mの石塁を幅約80mにわたって積み上げたもので、満潮時に入った魚介類を干潮時に採取する漁法である。ミズイカ、スズキ、チヌ、イワシ、キビナゴなどが獲れたらしい。この石干見は沖縄地方の南方海域に多いが、長崎県あたりが北限になるのだろう。

湾の北側の先端・長崎鼻には四角の形をした灯台が見える。また近くにキリシタンの墓があった。墓は日本の伝統的な様式を踏襲しているが、墓石の上に十字架が置かれていることでこの墓の人物がキリシタンであったことがわかる。墓名碑に相当する霊名塔には洗礼名が刻まれていた。

県道233号は渚ノ元の集落から内陸部に入り、新村、岳を経て、高崎の集落に至る。したがって三井楽半島の北端にある万葉漁港（第1種）には行かなかった。

三井楽半島北端の柏の集落は、江戸時代は捕鯨の基地であった。また数km沖に浮かぶ姫島には大村藩からキリシタンが移住し、一時期、人口が300人を超えたこともあった。しかし1959（昭和34）年に15人がブラジルに移住、その6年後の1965（昭和40）年には残った全世帯（7戸38人）が島を去って無人島になっている。

この日に戻る予定になっており、三井楽及び岐宿の調査が残されていたので残念ながら北端に行くのは諦め、県道233号を直進した。内陸部を横断すると、高崎漁港に出た。高崎漁港には漁船が7～8隻係留されており、そのうち定置網の引き上げに使うウインチを装備した漁船が2隻であった。

三井楽半島の東岸を大川、後網、八ノ川の集落を経て、三井楽の中心市街地である濱ノ畔に着いた。途中の集落は何れも人口が100人に満たない小規模なものである。県道233号はやがて国道384号に合流し、ちょうど半島を一周したことになる。

道の駅・遣唐使ふるさと館

国道384号沿いに「道の駅・遣唐使ふるさと館」が置かれている。ここは長崎県の離島に

最初にできた道の駅で、2006（平成8）年8月に開業している。

施設は2階建てで、中央に展望台がたつ。1階は和室の大広間と料理研究室や加工場になっており、一般客が利用できるのは2階部分だ。2階には物産販売コーナー、レストラン、遣唐使関連の資料展示コーナーとシアターがある。レストランはあいにく団体客向けの貸し切りになっていて、利用することができなかった。物産コーナーにはあまり魅力的なものは売っていない。展望台はらせん階段を歩いて登らなければならず、足の弱い人にはかなりの負担になる。苦労しながら階段を上り、展望台から市街地や近くを流れる河川の写真を撮った。

遣唐使関連の展示コーナーには旧三井楽町の町史が置かれていたので、閲覧し、遣唐使に関する部分を写真撮影した。

630（舒明2）年に始まった遣唐使は当初、壱岐、対馬を経て朝鮮半島を迂回する北路であったが、663（天智2）年の白村江^{はくすゑのえ}の戦いで新羅との関係が悪化してからは九州・沖縄方面に迂回して唐に向かう南島路に変わり、さらに777（宝亀8）年以降（第10回）は直接東シナ海を横断して揚子江に入る南路に変わった。

この南路になってから五島列島が唐に向けて旅立つ最終地となった。南路を航走するとおよそ10日間の航海で揚子江河口に達したといわれており、航海日数は大幅に短縮された。

そして、福江島の北西端に位置する三井楽は食料や水を補給し、船を整備する役割を担ったとされている。このことが三井楽を「遣唐使のふるさと」と称する所以であった。ただ、最終寄港地は三井楽以外にも五島列島に何ヶ所もあり、具体的にいつ、どこの港を最終寄港地にしたのかははっきりしていない。この歴史を島おこしのネタにしようと「遣唐使ふるさと館」がつくられたわけだ。なお遣唐使船は4隻の船団で構成され約500人が乗り込んだといわれているから、日本の玄関口である三井楽を含む福江島一帯は大いに賑わい、文化、経済の中心地として繁栄したことは想像に難くない。

遣唐使船は894（承和5）年に菅原道真の建言により停止されるまで、合計17回、約250年間続いた。この間、唐からもたらされた情報は奈良時代から平安初期にかけての日本の政治・社会・文化に多大な影響を与えた。また第16次遣唐使（804年）には、空海や最澄も乗っていたとされて、上述したように空海の足跡は福江島の各地に残っているのは上述した通りだ。



道の駅・遣唐使ふるさと館（左）、館内に展示されていた遣唐使船の模型（右）

五島焼酎

遣唐使ふるさと館の道路を挟んだ反対側に焼酎の蔵元があった。

もともと福江島は古くから焼酎の原料である麦や芋の栽培が盛んであったが、五島列島には酒蔵がなかった。そこでこの五島市産の原料を使った焼酎造りにより、島の活性化を図ろうと 2008（平成 20）年に㈱五島列島酒造が設立された。

平成 20 年度に「農山村漁村活性化プロジェクト支援交付金」を活用して施設を整備したのである。翌 2009（平成 21）年 7 月には初出荷しているの、丸 13 年を経過したことになる。なお、上五島町の有川には五島灘酒造㈱がこの会社よりも 1 年前の 2007（平成 19）年に設立されている。

㈱五島列島酒造の従業員は杜氏を含めて 4 人で、小規模な酒蔵である。杜氏も島の人だという。

麦焼酎の原料は島産の二条大麦と麦麴、芋焼酎はかんころ芋の原料として栽培されていた「高系列 14 号」がメインであるが、最近人気の「紅はるか」を原料としたものもある。なお、芋焼酎の方は米麴を使用している。

焼酎の銘柄は、五島麦（25°）、五島芋（25°）、五島芋 40°、五島椿（椿酵母を使用）の 4 種類である。「紅はるか」を原料とした焼酎は、2021 年にフランスで開催されたお酒の鑑評会の樽貯蔵部門で金賞を受賞している。通常、芋焼酎はステンレス製の樽で熟成させるが、この「五島芋紅はるか樽熟成」はシェリー樽とオーク樽の両方で熟成させ、それぞれの樽の原酒をブランドしたものである。店番をしていた青年によると、木樽での熟成がフランス人の嗜好にあっていたのではないかという。五島麦は 720ml が 1,815 円（税込）、五島芋は同じく 2,035 円である。

大きな瓶の焼酎は重いので、麦と芋の 300ml のセットを飲み比べるために購入した。私が焼酎を飲み始めた 1960 年代後半は甲類が中心で、酒が臭いため「梅割り」や「ブドウ割り」にして飲まれていた。その後、乙類がブームとなり、その頃は薩摩「白波」を愛飲していた。当時の白波は雑味が強かったが、その後、マイルドな焼酎が普及し、「魔王」や「森伊蔵」「村尾」などが高値で取引されるようになる。㈱五島列島酒造の芋焼酎はまさに現代人好みのマイルドな味であった。少々変わり者の私は昔の雑味の強い個性的な焼酎を好み、今までに訪れた島のなかでは、青ヶ島の「青酎」が気に入っている。



㈱五島列島酒造（左）、芋と麦の焼酎（右）

㈱五島列島酒造の青年に紹介してもらった三井楽の中心市街地にある「一龍宝」という中

華料理の店に行き、「長崎ちゃんぽん」を昼食に食べる。

昼食後、三井楽湾に出て、海岸沿いを五島漁協三井楽支所に向かう。三井楽湾の湾奥には小さな河川が流入し、河口干潟が広がっている。ちょうど干潮時にあっており、干潟では10人ほどが潮干狩りをしていた。貝の種類は確認できなかった。

五島漁協三井楽支所

昼食後、五島漁協の三井楽支所を訪ねた。同支所は三井楽半島東岸の付け根あたりに位置する。三井楽漁港（第2種）では定置網の水揚げと漁獲物の処理作業が行われていた。4～5kgほどのブリが大漁であった。

船倉からの陸揚げはほぼ終了しており、荷捌き所では大勢の人がブリの出荷作業に追われていた。このブリは㈱三井楽定置の大型定置網に入ったものである。同社は底定置網と合わせて2ヶ統分を経営しており、従業員は18人を抱える。このうち船倉からタモ網でブリを水揚げしていた2人はどうも外国人の青年のようだった。残りのメンバーはブリを計量し、一本ずつ箱立していた。

事務所に顔を出すと支所長とおぼしき人が対応してくれた。簡単に三井楽の漁業の概況を聞いた。ただし来客があったためあまり長く取材できなかった。三井楽支所には水研センターから受託したクエの漁業実態調査で2005年と2006年に訪れている。特に2006年の年末にはクエ延縄漁師の忘年会に招待され、五島栽培漁業センターの服部所長らと出席し、クエを鰭腹いただいたことがあった。

旧三井楽漁協は2009（平成11）年に五島漁協と合併している。同漁協の支所の中では最後の合併参加だったようだ。正組合員は100人ほどで、五島漁協の支所の中では最も多い。

三井楽地区の漁業は定置網が中心である。現在、大型定置網2経営体と小型定置網6経営体の併せて8経営体、12ヶ統が営まれている。最も大きいのは上述した㈱三井楽定置である。こちらの乗組員は上述したように18人と多いが小型定置網は3～5人ほどだ。定置網は基本的に周年操業で、三井楽半島の周囲にほぼ等間隔に設置されている。定置網の漁獲物はブリとヒラマサが中心で、水揚量は年間800トンほどだ。

定置網の他に刺網、延縄、曳縄釣り、一本釣りが営まれている。一本釣りは40～50名ほどが営むが、そのうち市場に出荷するのは20人ほどである。残りは自家用が中心だ。漁獲対象はクエがメインだが、最近クロムツを漁獲とするケースも多くなっている。



船倉からブリを水揚げ（左）、ブリの選別作業（右）

延縄は10数名が営み、主にクエを対象としている。曳縄釣りはマグロ、ブリ、ヒラマサが対象で、延縄との兼業が多い。

漁獲物のうち、大量に水揚げされる大型定置網のものは直接、長崎魚市や福岡市中央卸売市場などに出荷しているが、釣りなどの量的に少ない漁業はトラックで福江魚市に出荷している。

岐宿地区

三井楽支所を辞してから国道384号を東に向かう。白良ヶ浜万葉公園を過ぎると岐宿地区に入る。岐宿地区は福江島の北部に位置し、福江島の約4割を占める。東に権現嶽、南に八本木山、西に七ツ岳、父々岳が連なり、東南西の3方を山岳が囲み、中央部が山内盆地を形成する。こうした立地条件から一ノ河川、浦ノ川、鰐川、大川原川の主要河川が地区内を流れている。平地と水が相対的に豊富なことから、島内最大の農業地帯を形成している。

トンネルを5つほど抜けると、白石湾々奥に出た。福江島には3つの高校があるが、そのうちの一つである大島南高校のある場所を左折し、白石湾の西側を走る。

白石の集落に「ともづな石」と呼ばれる遺跡が残っている。石は小さな祠に祀られているが祭壇の下にあるため、よく見ないとわからない。何でも遣唐使船が補給のために立ち寄った際、船の綱をつないだ石と伝えられている。この「ともづな石」は上述した日本遺産の構成要素の一つとなっている。現在「ともづな石」を収容する社は海上安全と海運繁盛を祈願する場所になっているようだ。

白石湾はきわめて深い入江で、しかも東側から魚津ヶ崎が長く伸び、さらに西側から西津の鼻が伸びるので、天然の良港としてはまさに申し分ない。遣唐使船の寄港地は三井楽よりも白石湾の方が優れていたと推測される。事実、「ともづな石」があり、さらに東岸の水ノ浦には「遣唐使船修理地史跡」の石碑が立っているところから見ても遣唐使船の寄港地は白石湾と考えるのが説得力を持つ。

「ともづな石」の前には白石漁港（第1種）が整備されており、10隻ほどの漁船が係留されていた。付近にいた人に五島漁協岐宿支所の場所を聞き、そちらに向かう。国道に戻り、湾に沿って進むと、水ノ浦教会があった。その先を左折して細い曲がりくねった道を進むと上述した史跡があり、さらにその先に五島漁協岐宿支所が置かれている。



白石湾のとも綱石（左）、水之浦の遣唐使船修理地史跡跡の石碑（右）

五島漁協岐宿支所

岐宿支所には離島漁業再生支援交付金の事例調査（離島センターの「しま」に掲載）やクエ漁業の調査などで3～4回は伺っている。当時は五島水産㈱の山下社長が五島漁協の組合長だったが、知り合いの人はいなかった。ただ昔話をすると、ころよく取材に協力してくれた。

旧岐宿漁協は1997（平成9）年に合併に参加している。現在の支所の正組合員は60人ほどである。岐宿で営まれている漁業は定置網漁業が中心で、一本釣り、刺網、タコツボなどである。磯根漁業は近年の磯焼けの進行で資源が枯渇し、アワビなどはほとんど獲れないという。

定置網は大型定置網が1ヶ統、小型定置網が7ヶ統である。一本釣りは5トン以上の漁船で操業する船が7～8経営体で、5トン未満船は多い。この5トン以上の漁船は男女群島まで遠征している。漁獲対象はクロムツやカツオ、タチウオが多い。クエ釣りは4人ほどである。マグロ類は漁獲制限があるため行く人はいない。刺網は10数人が営んでいる。

なお、五島水産は当時養殖魚を柵取りや刺身に加工して、消費地に空輸しており、五島社長の奥さんから話を聞いたことがあるが、この五島水産は玉之浦でマグロ養殖も手掛け、加工事業も従来と変わらずに営んでいるという。再訪してみたらと勧められたが、時間が限られていたので諦めた。

岐宿地区の年間水揚げ量は定置網と一本釣りを中心に約300トン強である。大型定置網の漁獲物は長崎市や福岡市中央卸売市場に直接出荷し、残りの半分ほどは福江魚市場に出荷している。

漁協の近くでタコツボ（プラスチック製、蓋なし、餌なし）の手入れをしている壮年の漁師がいたので、少し話を聞いた。彼は13年前まで漁協の職員をしていたという。ころなしか見覚えのある顔だったので、当時会っていたかもしれない。職員を辞め、漁師に転向した。

現在は一本釣りなどと共にタコツボ漁業を営んでいる。行使するタコツボは3,000個で、この規模のタコツボ漁業の許可は福江島内で5経営体だけだそうだ。岐宿の他に三井楽、玉ノ浦、大浜と奥浦であるが、奥浦の人は現在操業していないという。



五島漁協岐宿支所の建物（左）、漁港でタコツボの準備をする漁業者（右）

それからクエの話になった。玉之浦の栽培漁業センターに本藤さんがいたころ（彼とはクエの調査で一緒に仕事をしたことがあり、その後センターをやめて古里の京都府で漁師を

している)、白石湾内にはクエの幼魚がたくさんおり、本藤さんとは採卵用の親魚を提供するなど一緒に仕事をしたそうだ。しかし、今はクエの幼魚は少なくなっており、分布が北上しているのではないかという。

金福寺

水ノ浦漁港（第1種）の北側には魚津ヶ崎公園が整備されている。キャンプ場や遊歩道がある。見晴らしのよい場所に「花笑みきくや」というカフェがあり、ここでソフトクリームを食べる。

続いて金福寺に向かった。市街地の中なので場所がよくわからない。近くまで来て庭仕事をしていた人がいたので、場所を尋ねると偶然にも大町さんという郷土史家の方だった。勿怪の幸いと、彼に案内を頼む。

金福寺は宇久家第8代覚公が宇久島から岐宿に移住した年に建立した曹洞宗の寺である。ここに覚公の墓が置かれている。大町さんが墓まで案内してくれた。墓には五輪塔の墓石が2基並んでいる。向かって右が覚公の墓で、左が平田甚吉という人物の墓で宇久家の一員だった人らしい。はっきりしたことがわからないが、夫婦の墓ではないことは確かだという。墓の周囲は石柱で囲われているが、この囲いは後世になって、ブリで莫大な財産を築いた西村団助が整備したものだ。隣にも古い墓があったが、こちらは貞方家のものらしい。宇久覚公が宇久島から岐宿に移った時、岐宿で勢力を張っていた貞方家を滅ぼした。しかし、その後、宇久家に災難が多発したそうで、これを貞方家の恨霊の祟りと考え、貞方家を祀ることになったようだ。この墓は貞方家を再興した人の墓だという。

覚はその子・勝と共に城嶽（216m）に山城を築き五島列島を統治したが、1388（嘉慶2）年に58歳にして逝去した。勝は父・覚をこの金福寺に葬り、金福寺の開基とした。そして自らは福江の辰ノ口に移った。

父子が築いた山城は現在、石垣が残るのみである。この山の頂上は展望台になっていて、素晴らしい眺望だそうで、是非登ったらよいと勧められたが、その時間はなかった。

ついでに福井県からやってきてブリ漁場を発見し「ブリ大尽」と言われた西村邸跡に連れて行ってくれた。西村家は岐宿の土地の7～8割を保有し、五島藩の参勤交代の資金を提供し、藩の財政を支えたという人物である。



五島家第7代・宇久覚公の墓地（左）、金福寺の本堂（右）

山内盆地

五島市役所の岐宿支所の前を通り、県道 31 号を内陸部に向かう。31 号は 3 方を山に囲まれた山内盆地の中央を走る。この盆地は約 3 万年前にできた古山内湖の跡が隆起して形成されたようだ。

道の両側には田、畑、牧草地が広がり、福江島最大の農業地帯となっている。3 方の山岳から水が流れ込み、鱒川を形成、したがって盆地は水が比較的豊富なのだろう。水田はレンゲ畑、水が張られた田、田植えがすでに終わった田に分かれていた。

31 号に入って数kmほど進むと楠原教会があり、その隣に復元された牢屋跡、信仰の自由百年祭記念碑、マリア像が置かれている。教会前の楠原天主堂の解説板には日本語の他に、英語とハングル、中国語で教会の概略が書かれていたが、ここでもカクレキリシタンと復活キリシタンの混同が見られ、明治初期のほんの一時期に過ぎなかったキリシタン弾圧の刷り込みが続く。

途中に山内盆地の展望所と書かれた案内板があり、車で登っていったが、よくわからなかった。比較の見晴らしのよい場所で、盆地の写真を撮った。

やがて 31 号線は県道 27 号と交叉した。ここを右折して福江の市街地に向かう。交叉点の辺りは 4～5 km はあろうかと思われる直線道路が伸びる。朝通った道だ。

27 号を直進して国道 384 号に出て、国道沿いにある「ごとう茶生産組合」の直売所でお茶を購入する。島内を走っていて、あちこちでお茶畑を見つけた。福江島で茶がつくられていることは知らなかったの、どんな味か興味があったからだ。この店舗は茶の生産者が集まっておそらく製茶作業に共同で取り組んでいると思われるが、店の人に聞いても要領をえない。自ら販売しているお茶についてあまり勉強していないようだ。結局、福江島の茶の歴史や実態はわからなかった。

続いて近くにある J A の直売所・「五島がうまい」に寄り、本来は上五島町の特産品だが、家に「五島うどん」の在庫がなくなっていたので購入する。



山内盆地を横切る長崎県一長い直線道路（左）、盆地の水田から七ツ岳を望む（右）

トヨタレンタカー営業所の隣のガソリンスタンドで給油し、車を返却。空港まで送ってもらい、18 時 20 分発の ANA616 便で福岡空港に出て、羽田空港行に乗り継ぐ。夜遅く羽田空港に着いた。